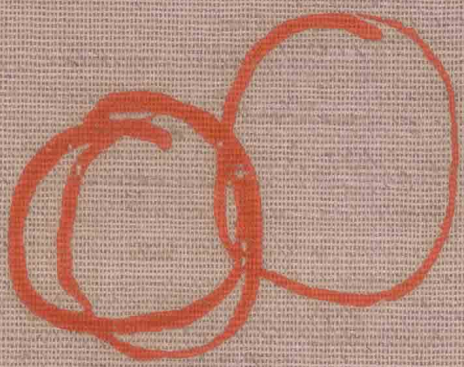

高見順全集

第六卷

勁草書房刊

高見順全集　第四卷

定價二五〇〇圓

昭和四十五年四月十五日印刷
昭和四十五年四月二十五日發行

著　者　高見順
發行者　井村壽二
印刷者　山田博
發行所　勁草書房
東京都千代田區神田駿河臺二ノ三
電話　東京二九四（六一二一）
振替　東京一七五二五三
©　高見順　一九七〇
〔〇三九三—八三二四—一八三六〕

高見順全集　第六巻

編纂委員
川端康成
伊藤整
澁川驍
平野謙
中村眞一郎
小田切進

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

この神のへど　7
いやな感じ　179
解説　本多秋五　515
解題　528

この神のへど

どの神やらがへどをついた。
其へどの己は、其場にへたばつてゐて、
どこへも、どこへも往くことが出來ない。
鷗　外

第一章　或る恐怖

薔薇の花が恐いと、もし誰かが諸君に呟いたとしたら、諸君はこれをどう思ふか。この呟きに、どう答へるであらうか。私だつたら、その誰かに、左様、薔薇の花といふからには、その誰かを女性と見るのが適當だとするならば（私がでなく、諸君が、さう考へるならば）その女性に、私は直ちに同情と共感の語調で、

「さうですか、それは——」

と言ふであらう。さぞ苦痛なことだらうと、恐らくそれが言葉にならない位私は私自身がその恐怖の苦痛にそのとき迫られたかのやうに、「それは——」とだけ言ふであらう。相手が女性だからとて、おもねつて言ふのではない。男だつて、男のなかにも、薔薇の花は恐いと言ふ人がゐるにちがひないのだ。見るからに恐怖の表情を以つて、見るからに逞しい男が、薔薇の花が恐いなどといふことを呟くであらう。諸君は信じないかもしれないが、私には、さういふ男性の存在することが確信を以つて想像されうるのである。何故なら——。

「白い紙が恐い」

と私が諸君に言ふと、諸君はこの私の言葉をどう取るか。冗談を言つてゐると諸君は笑ひ出すであらうか。

私は、諸君がそんな風に私の言葉を頭から受けつけないさういふたちの人間であることを、心から望みたい。私は私の、うそいつはりの無い、それどころか、内心のうめきとも言ふべきその言葉がそんな工合に嘲笑されることを必らずしも喜んでゐるのではないが、諸君が私のその告白を、馬鹿なと嘲笑しうるさうした精神狀態であることを、言ひかへると、私の言ふことが全く理解できないそして神經的にいささかも共感の持てない、さういふ人間であることを心から望みたいのである。

私は白い紙が恐いのである。正確に言ふと、恐かつたのである。だが、今でも、ひよつとすると、ときどき、白い紙が恐いといふ一種の狀態に陷る。全くそれは、陷る、——眞暗なやうな狀態へ突如、陷るのである。

「白い紙が恐い」

すると、諸君のうちには、
「畫家のくせに、白い紙が恐いとは……」
かう私に言ふ人がゐるだらう。それは、諸君のうちの、私を知つてゐる人である譯だが、
「さうなんだ。それで、——畫が描けない」
私は答へる。
「畫家にとつて、畫が描けないといふことほど、苦しいことは無い」
私は、さう、私の苦痛を訴へるが、私を知つてゐる人に、私が畫を描けないといふその苦痛だけは知つて貰ふことができるけれど、相手がいくら私を知つてゐる人だとしても、さういふ苦痛に私を陷れた苦痛、つまり私の畫家としての精神的苦痛の、その原因を成してゐるところの、私の人間としての生理的苦痛とはどういふものか、それを知らせることは、殆んど不可能である。白い紙への私の恐怖とその爲の苦痛、これは殆んど誰にも分つて貰へないのである。それが私には分つてゐるのである。そこで私は、
「畫家にとつて畫が描けないといふことは、死と同じだ」
さうしたことを言ふほかは無い。
私は白い紙が恐いのである。その私は、薔薇は恐くない。薔薇を見たつて、薔薇に觸つたつて、どんな薔薇をどんな風に想像したところで、一向に薔薇などは恐くないのであるが、しかし私は、誰かから自分は薔薇が恐くてたまらないのだと告白されたならば、たとへ、その薔薇に對する恐怖と苦痛は私には分らないにしても、恐怖と苦痛そのものは私に分る。私とその人との、恐怖の對象は違つてゐても、同じいまはしい神經異常に私も取りつかれたから、私には分るのである。
實に、それは、取りつかれたと言ふ他は無い。突如として私を襲つたのである。私は、では、いつ、そんないまはしい奴に取りつかれたか。……

*

——私は、山莊にゐた。
きびしい寒さで私は眼がさめた。窓を開けると、霜が眞白だ。私はくしやみをした。
「いかんぞ」
と私は呟いた。風邪をひき易い私だつた。
山道を半町ほど降りたところに溫泉宿があつて、そこで私は食事を取つてゐた。必要以上の厚着をして、ステッキを片手に山莊を出ると、山道の途中に大根畑があつて、土を高めに盛り上げたその畑の畝の傾斜に、美しい霜柱の立つてゐるのが私の眼を惹いた。三寸もあらうといふ霜柱の高さだつた。これでは寒かつた筈だとひとりで頷きながら、ステッキの先を霜柱に當てると、あきれるほど脆く、しかし朝の陽にそれ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

は固いガラスのやうな光りを放ちながら崩れた。光りだけでなく、ガラスの管のやうな形もしてゐるが、崩れた霜柱のなかには、細い絹絲のやうなのも混つてゐた。その細さが、なんとなく私の心をとらへて、私はしやがみ込んだ。どのくらゐ細いのも混つてゐるのだらう。さうした興味のやうだつたが、しやがんで、ステッキで霜柱を探つて行くうち、實は太い細いが混つてゐるのではなく、細い絹絲狀のが集つて管形の結晶に成つてゐるのだと知らされたが、そのとき私は、同時に、或る奇妙な精神的惡感のやうなものに襲はれてゐた。

霜柱を絹絲の細さと知らされた私は、霜柱がそんな細さであるのは、土中の水分が土壤の細孔を通して、地上に誕生したものだからだといふ事實を知らされたのだが、さうした霜柱が、——たとへて言へばきのこのやうに、さうして地から生えたその霜柱が、きのこほどの脆さもなく、いささかの抵抗もなく、また、たとへて言へば枝から散つたばかりの落葉を掃き寄せるやうな、地とのいはば全き無關係感でもつて、私のステッキの前に崩壞してゐた。何の執着もなく、地から離れた。地から生れた霜柱のくせに、その地と接する一線に於いて、何か斷絶したものが存在してゐる。

霜柱の取り除かれたあとの黑い土も、つい今し方までその上に霜柱を置いてゐたとは思へない、けろりとした土の顏であつた。そこには、霜柱を生んだやうな何の痕跡も殘つてなかつたし、霜柱もまた、その地面に何の痕跡も殘してゐなかつた。

かうしたくだくだしい說明は、そのとき、そのことが私に與へた或る惡感めいたもの、——それは苦痛を伴つた寂寥の如くであり、また强さの點では、悲哀のやうであり恐怖のやうであり、それは自分でもよく分らないのだから諸君に傳へやうもないと成ると、せめては、そのとき、或る陰慘な、さうだ、いやアな氣持と言ふのが一番近いやうだ、そいつに、ふッと私が襲はれたといふことだけは傳へたいのだが、それだけ傳へるにも、まことに不都合な說明と思はれる。思へば、でも、くどくどと述べなかつたならば、一層、そのところが朦朧と成ることわりとも言へるだらう。

私は、いやアな氣持だつた。私には、くだけた霜柱が針のやうに見えた。私は眼を手で蔽つた。針が私の眼に突きささつてくるのを防がうとするかのやうに眼も、力をこめて閉ぢたのである。

溫泉宿の玄關に立つと、

「お早うございます」

と女中は言つて、

「おや、お顏色がすぐれませんが」

「風邪をひいた」と私は怒つたやうに言つた。

「ゆふべは珍しく冷えました。あんな冷え方は今年初めてで

す」
「めしを賴む」
「はい、はい」
私は誰かと話がしたかつた。そのくせ、女中とは話がしたくなかつた。
番頭と顏を合はせると、彼は、
「お仕事はできましたか」と言ふ。
「まあね」と私は言葉を濁した。
仕事をしに前の日、私は山莊に逃げて來たのだが、仕事はできなかつた。その仕事といふのは、身すぎ世すぎの、挿畫の仕事で、私には不本意の仕事だつたから氣が乘らないといふ點もあつたらうが、今思へば、あのいまはしい奴が私の傍に忍び寄つてゐたのだ。急ぎの仕事だつたが、家ではどうしてもできなかつた。それもいまはしい奴のせゐだつたのだ。
「冷えますから、お氣をつけなすつて」
「大丈夫だ」
私は番頭とも話がしたくなかつた。そのくせ、誰かと話がしたくて、たまらなかつた。

その日も仕事ができなかつた。だのに、私はくたくたに疲れた。疲れがひどいと眠れないくせがあつて、私は睡眠藥を飲んで寢た。

朝、遲く、私は目覺めた。前日のやうに寒くなかつたせゐもあらうか。寒くないといふより、むしろ暖かかつた。齒ブラシをくはへて私は庭に出た。
山莊の軒近く、つつじが植ゑてある。春には綺麗な薄紫の花をつけるつつじが（私はこのつつじの花を見たことがある。いや、二年つづけて見たのである。）可哀さうに、山芋の蔓に全身を、——植物にこの用語はをかしくても私の實感として、全身を蔽はれてゐる。心臟形の、すでに黃色く枯れた葉を、一面につけたその蔓を、取り除いてやらうとして、蔓に何か、光る玉を見た。いぶし銀のやうに、陽に輝いてゐる。
ぬかごである。馬鈴薯を小さくしたやうなと言へば、それまでだが、その形になんとなくとぼけた面白さがあつて、私は二つ三つと摘み取つた。さうして私は、山芋の黃色く枯れた葉の下で、つつじの葉がまだ靑いといふことに氣付いた。山芋の葉が霜除けに成つてゐるのだ。そして霜除けのない部分は、そのつつじの葉も紅葉してゐた。ぬかごを掌にころばせながら、さういふことの、人生にそして藝術につながる意味を、左樣、私はそこに見てゐた。
ぬかごを掌にころばせながら、私は、宿への山道を降りて行つた。前日の霜で、樹々の紅葉もひとしほその色を深めたやうであつた。
大根畑のあの霜柱が、うそのやうに今朝は無かつた。が、

私は立ちどまつた。あの物凄い霜柱だつたからには、寒氣もさぞかしと思はれるのに、大根の葉は、眼にしみるやうな爽やかな綠だつた。その葉も、豐かにのびのびと大きくひろがつて、寒さにいぢけたさまなど微塵もない。その葉の下では、もろ肌脫いで、そんな感じで、白い大根が地から肩を出してゐる。他よりぬきんでようと競ひ合つてゐる如くだ。

なんといふ生命力の强さ。私の胸は、感動に震へた。震へたといふのは決して修飾ではない。

震へる胸を、私は兩手で搔き抱いた。わが手でわが身を抱いたとは、何事を意味するのだらう。

朝食を攝る前に、私は高原を散步したくなつた。高原は四方、山で圍まれてゐて、山の彼方の湖に發する川が、一筋、高原を貫いてゐる。山を深くゑぐつて、川の流れ出るその山峽の方角から、陽が昇り、湖へ向けて沈むのである。

高原の一部は濕地帶になつてゐた。そこに天然紀念物の濕原植物群落があつた。私はその方に足を進めた。唐もろこし畑から、枯れた葉の、風にがさがさと鳴るのが聞えた。大袈裟な響きなのが微笑を呼んだ。私はそれだけ、好機嫌だつた。

高原は、殆んどが薄の穗の白く傾いてゐる雜草原で、耕土に乏しかつた。その少ない畑のなかに、さつま芋の畑があつた。

見ると、畑一面、そのさつま芋の葉が、無慙に霜にやられてゐる。激烈な藥でも浴びせかけられたかのやうに、葉は眞黑に萎えしぼみ、べたべたに爛れ腐つてゐる葉も見られた。何か炎症でもおこしたみたいだ。同じ霜に一向にめげることなく綠の葉をひろげた大根畑を見てきただけに、そのやられ方は、いたましく私の眼に映つた。肉體的苦痛さへ呼んだ。

既に枯れかけてゐた葉であるが故に一擧にやられたものと思はれる。早晩、枯れる運命の葉が、早い霜にその運命を早めただけであつて、これからと勢ひ込んでゐたのが、むごたらしくやられたといふのではないと見られたが、それは、私にとつて毫も慰めとはならなかつた。むしろ、さう見られることが、私の苦痛を增してゐた。

生命力の衰へてゐるものは、ちよつとした躓きでも、脆く滅びてしまふ。そのやうに感じられることは私を苦しめた。

私は、かねて、生命力の衰へを自らに感じてゐたからである。

衰へは私の齡の故ではない。みづみづしい青春の過ぎ去つたことは事實であるが、生命力の衰へを年齡の上から認めねばならぬ身でもなかつた。正に壯年の逞しい活動期に入つていい齡であつた。

終戰後、私は先づ胃潰瘍に倒れ、つづいて胸をやられた。終戰後から今日まで、大半の時日をかくて私は病床で過した。

山莊の軒近くのつつじの花を私が二年つづけて見てゐると、

先きに言つたのは、サナトリウムを出てからの保養を、この山荘で行つてゐたからである。私の友人の山荘だが、まるで私の山荘みたいに使はせてくれた。

この一年、私は漸く立ち直つて、仕事をはじめた。しかし、私のかねて感じつづけてゐた生命力の衰へ、その衰弱感からまだ自分を離すことができなかつた。それも、つまりは、衰弱感を感じつづけてゐたと言ふよりは、衰弱感に親んでゐたと言ふ方がほんとかもしれない、そんな私であつたからか。私は、私の生命力が衰へてゐるといふことを、何か自分で樂しんでゐるところもあつたやうだ。

それだけまた、私の生命力の衰へは、事實なのでもあつた。私は、慘憺たるさつま芋畑の前に立つて、それを突然、感じ取つた。啓示のやうに、それが私に來た。

生命力の衰へを樂しむなどといふことは、生命力の衰へそのものの何よりの證據でなくて、なんだ。私は自分に叫ぶとともに、あの大根畑の、あの逞しい綠の、あの生命力を憎んだ。青春を憎んだ。つい今、感動を與へられたそいつ、いや、それ故餘計、そいつに對する憎惡は募つた。何ものにも負けず自分を主張し表現しうるそいつを憎んだ。

私は、いつか、眼前の、見たところは哀れな黑い葉も憎んでゐた。こいつらは哀れな死にざまを見せてゐるやうだが、實は地下に既に「仕事を」たつぷりと殘してゐる。挫折のやうな顏をして、どつこい、見事な「仕事」を隱してやがる。

俺は、どうだ。俺はどうなるのだ。仕事はこれからといふところで、早くも生命力の衰へに蝕まれてゐる。——ステッキに兩手をやつて、私は崩折れさうな身體を支へてゐた。

この時である。

高原のその道を一臺の自動車が、濛々たる砂煙をあげて疾驅してきた。別荘の多い湖の方から來たのである。

素晴らしい高級自動車だと見た私の前を、それは、その私に埃を存分にかぶせて走り去つた。

走り去つたのなら、いいのだ。いや、私の前はたしかに走り去つたのだが、その車は、車の中から私に向けて、食ひ入るやうな視線を終始注いでゐる或る不氣味な眼を乘せつつ、走り去つたのである。

私は、はつと息を呑んだ。遠い、暗い記憶のなかに、私は矢庭に、えり首をつかんで連れ戻されたおもひだつた。

車は、氣のせゐか、私の前を走り去ると、やや速度を落したやうに見えた。とまりさうに見えた。高原の道に立つた私を、車中の眼が、この私と認め、この私と分つて、運轉手に車をとめることを命じたかと想像された。

車中の眼は、車のうしろの窓から、なほも私に注がれてゐる。

その眼に向けて、私は上半身を傾けた。とまりさうだと見

た車に、私は、私の肉體は、反射的に驅け寄らうとしてゐた譯だが、私の心は、その車に、その車中の眼に近づくことを警戒してゐた。

私は上體を傾けただけだつた。すると、車も、――とまりさうに見えた車も、速力を增して、そのまま、私から走り去つた。

走り去ると見たときは、車中の眼は窓から離れてゐた。その眼は、季節外れのサン・グラスをかけてゐた。晩秋の强い紫外線を、その女は、いとつたのであらうか。それとも……。

さうだ。その眼は、女の眼であつた。

サン・グラスのために、私はその眼の女が、果して私の記憶のなかの女だつたかどうかは、さだかでない。さだかでないので、思へば、私は、とまりさうな車に驅け寄らうとしたのだらうが、それを同時にとめるものが心にあつたのは、その女を、私の暗い記憶のなかの女、――それは、暗いなかにギラギラと光つてゐる――と見たからに他ならぬ。

車內の眼は、私の腦裡に燒きついた。

朝食を攝ると、私はすぐのバスで高原を降りた。畫は到底描けない、生理的にそれは不可能だといふ一種の自覺が、――前にしばしばあつたやうな、何かかう、もたもたして畫がどうも描けないといふのとは、はつきり違ふそれが私に來てゐた。いまはしい奴に、今や私は取りつかれたのである！

汽車は東京まで三時間だつた。東京に着くと、私は雜誌社へすぐ電話しようと思つたが、何故かそれが出來なかつた。

何故か、それが分らない。仕事のできなかつたこと、そして、できないことを、電話でもつて、無責任に傳へるのは、雜誌社に惡いと思つたからだらうか。それもあつたが、別に、電話そのものへの嫌惡も、あつた。斷乎として、それがあつたが、どうしてさういふことに成つたか、それも分らない。

雜誌社に行くのも、いやだつた。しかし、行かねばならぬ、だから、行かうと思ひつつ、私はうだうだと逡巡してゐた。

――既に、意志と行動との背離がはじまつてゐたのである。

結局、しかし、私は雜誌社に行つた。

「今日、入れなかつたら、間に合はない。困りますねえ」

私の言ひ方が記者に納得できないのは、當然だつた。

「すまないが、僕だつて困つてんだ」

「お身體が惡いと言つても、見たところ、もう……」

「胸の方ぢやないんだ。胸はもういいんです」

「では、どこが」

「どこがと言はれても、困るんだが」

記者のデスクには、尖つたペン先を上に向けて、ペン軸が立ててあつた。私は、あ、いかんと眼をそらせて、

「實際、困つた」
眼をそらせても、ペン先への恐怖は私から去らなかつた。
「どうしていいか、――自分で自分をもてあましてゐる。いや、もてあますなんて、そんな、輕いもんぢやなくて……」
私は、しどろもどろだつた。狹い編輯室の白壁も、私には堪らない。しどろもどろは、自分の困り方の説明しがたさから來てゐるだけではなかつた。
「神經衰弱、ひどい神經衰弱らしい」と私は喘いだ。
「ぢや、まあ、しやうがないですな」
投げるやうに言つて、記者は私の眼を覗き込んだ。その顏には、私を怒らせる一種の表情があつた。
「――神經衰弱だつたら。ただ、それが、どういふのか、ひどい神經衰弱なんだ」
雜誌社を出ると、鋪道で、ばつたり友人の榊原に會つた。陳腐な形容ながら、地獄で佛に會つたおもひだつた。私は縋りつくやうに言つた。
「飲まう」
「飲まう？　飲んでいいのか」
事實、私は榊原の腕に取り縋つてゐた。
「いいも惡いも、あるもんか。ひどい神經衰弱だ」
作家の榊原も雜誌社に行くところだつた。もう一度、一緒につきあへと言ふ彼に、
「ここで待つてる」
「ここで待つてる位なら」
「いや、ここで待つてる。部屋が俺には、いやなんだ。白い壁、白い紙、ペン先、――それがいやなんだ」
「なるほど、神經衰弱だ」
私は鋪道で待つた。私の前を自動車が交錯した。
車の中から私を見て行く者があつた。すると、あの高原で會つた車中の眼が鮮かに浮び出てきて、私をおびやかした。その眼は、内部から私を不氣味に凝視した。
一夜のうちに葉を黑く腐らせた霜、それは私の上にも降つてゐた。あの眼が私にはその霜ではなかつたか。
――あの眼の女が、高原のあの車のなかから私に向つて注いだ食ひ入るやうな視線、それとそつくり同じ彼女の視線を、私は遠い暗い記憶のなかで幾度か經驗してゐるが、特に私に忘れられないそのひとつを、私は思ひ出した。思ひ出させられた。思ひ出したくないのに、思ひ出の方から私に忍び寄つて來た。左樣、あの眼の女のやうに、足音もなく、すつと、――氣がつくと女が傍に立つてゐるのにいつも驚かされた、丁度それで、この場合は私の内部に、するりと忍び込んで來たのである。
あの眼の女は、果して私のそのいまはしい記憶の中の女な

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com